

## 第58回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2009年4月22日(水) 15時～17時

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

### 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・陶徳民 文学部教授、内田慶市 外国語学部教授、藤田高夫 文学部教授  
発表テーマ『東アジア文化交渉学会』の創立  
－東アジアの新しい文化像構築のための国際学会－

・古池 哲也 化学生命工学部准教授  
発表テーマ「甘くないお砂糖の世界  
－次世代ポストゲノムの担い手としての生理活性糖鎖－」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00～17:00)

- ① 北陽中学校の生徒募集開始について [資料1](#)
- ② コミュニケーションマークの策定について [資料2](#)
- ③ 国際部の新しい取り組みについて [資料3](#)
- ④ 平成21年度寄附講座について [資料4](#)
- ⑤ 関西大学小中高一貫教育シンポジウムの開催について [資料5](#)
- ⑥ 環境報告書の刊行について [資料6](#)
- ⑦ 関大生の活躍について [資料7](#)

### 4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐、  
陶徳民文学部教授、内田慶市外国語学部教授、藤田高夫文学部教授、  
古池哲也化学生命工学部准教授、  
カイト由利子副学長、アレキサンダー・ベネット国際部准教授、  
高増明社会学部教授、羽原敬二政策創造学部教授、  
鈴木清士関西大学北陽高等学校長、田中敦夫関西大学北陽高等学校教諭(中学校教頭予定者)、  
川端泰三関西大学北陽事務長、松並久典学長室次長(国際担当)、  
川原哲夫学長室次長(学長担当)、横山博行広報室次長、木田勝也広報課長 他

### 5 参考資料

(1) 経済・政治研究所 第186回公開講座

以 上

# 「東アジア文化交渉学会」の創立

—東アジアの新しい文化像構築のための国際学会—

関西大学文化交渉学教育研究拠点

(Institute for Cultural Interaction Studies : 略称 ICIS)

## 【概要】

2007年に関西大学が申請し採択されたグローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」では、新しい学問としての東アジア文化交渉学を構築し、かつ関西大学がこの分野の国際的ハブとして機能していくために、国際学会の設立を拠点形成計画の重要な柱として位置づけていました。その後、一年半におよぶ準備期間を経て、本年6月27日に「東アジア文化交渉学会」の設立総会と第一回年次大会を関西大学において開催する運びとなりました。

本学会は、東アジアでの文化生成・接触・衝突・変容・融合などの諸現象を動的に把握し、トータルな文化交渉のありかたを人文学の多様な方法を総合して複眼的な見地から解明することを目的とし、国内外の多くの研究者や関連学会、研究機関の賛同を得て設立されるものです。準備段階において発起人として百名を超える著名な研究者が名を連ね、毎年回り持ちで開催される年次大会も、第二回は台湾大学、第三回は華中師範大学での開催が決定するなど、国際学会としての規模と内容を備えたものとして発足することができました。また学会の英文機関誌 *Journal for Cultural Interaction in East Asia* の年度内刊行も決定しております。

設立総会・第一回年次大会においては、青木保文化庁長官の記念講演を始め、海外からの招聘者を多数含む第一線の研究者による基調講演と分野ごとの5つのラウンド・テーブルが設けられ、文化交渉学という新しい学問の視点から、世界レベルの議論が展開されることとなります。

関西大学が長年の研究蓄積を持つアジア文化研究をさらにグローバルに展開していくステップとしての本学会の意義と革新性をご紹介します。

## 【プロフィール】

グローバルCOEプログラム	拠点リーダー	文学部教授	陶徳民
	拠点サブリーダー	外国語学部教授	内田慶市
		文学部教授	藤田高夫

関西大学グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」については、本拠点ホームページ <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/index.html> をご参照下さい。

## 甘くないお砂糖の世界

—— 次世代ポストゲノムの担い手としての生理活性糖鎖 ——

化学生命工学部准教授 古池哲也

### 【概要】

2003年にヒトゲノムの塩基配列解読の終了が宣言され、現在、得られた遺伝子情報に従って生産されるタンパク質の機能に関する研究、いわゆるポストゲノム時代の真っ只中にある。一方で、ポストゲノムの次の時代を担う第三の生体分子として、生体内の糖鎖(生理活性糖鎖)の働きをターゲットとした、ゲノム創薬や再生医療等の分野で網羅的な研究開発も進められてきている。特にセレクチン、ガレクチンに代表される糖鎖結合タンパク質との糖鎖-タンパク質相互作用、あるいは細胞接着の初期段階で非常に重要な糖鎖-糖鎖相互作用等、生体内における糖鎖の役割が、近年、分子生物学の分野において脚光を浴びてきている。つまり、生体内の物質認識の役割を担っているタンパク質のマーカー分子となるのは糖鎖であることが非常に多く、この機能をうまく利用することができれば、有効な阻害剤の創製や、生体内で標的となるタンパク質や細胞などへの効果的なドラッグ・デリバリー・システムなどの構築が可能となるため、医薬品をはじめ、様々な分野で国内外を問わず活発に研究が行われてきている。

しかしながら、タンパク質-タンパク質間相互作用に対して、糖鎖-タンパク質間相互作用は、それほど親和性が高くないため、上記の相互作用が効率よく行われるためには、適切な空間距離と配向性を有した糖鎖の集積(クラスター)化が必要である。以上の観点に着目して、演者は、これまでにポリマーや dendrimer と呼ばれる分子を足場として、糖鎖を担持させたユニークな構造を有する糖鎖モデル化合物の開発を行い、生理活性糖鎖の持つ生物化学的情報を化学的な立場から解明しようという試みを行ってきた。そこで今回は演者がこれまでに合成した生理活性糖鎖モデル化合物の合成手法、および機能解析に関して紹介したい。

### 【プロフィール】

1967年岐阜県生まれ。関西大学化学生命工学部准教授。1991年成蹊大学工学部工業化学科卒業、1993年同大学大学院工学研究科博士前期課程修了、1995年9月北海道大学大学院地球環境科学研究科博士後期課程を期間短縮修了。博士(地球環境科学)取得。その後、科学技術特別研究員として、大阪工業技術研究所(現・産総研関西センター)に勤務した後、北海道大学大学院理学研究科において NEDO 産学連携プロジェクト博士研究員、北海道大学大学院地球環境科学研究科助手を経て、2007年より現職。専門は糖鎖工学で、生理活性糖鎖の生体認識機構を有効に利用することにより、医薬品、あるいは生体材料への応用を試みている。